江戸幕府265年のはじまり

1603(慶長8)年に、徳川家康が江戸に幕府を開いたことで江戸時代がはじまり、15代の徳川慶喜が将軍を辞める1867(慶応3)年まで265年間続いた。国が統一され、大名同士の領地争いのための戦いもなくなり、平和な世のなかになった。そして、江戸は日本の中心として大きく発展した。

<徳川家康が江戸にやってきた>

家康の前に政権をにぎっていた豊臣秀吉は、力のある家康を自分のいる大坂(現・大阪)から遠ざけるために、それまでの領地を取り上げ、関東に新しい領地を与えた。当時の江戸は、太田道灌(→p.15)が建てた城と集落があるだけの寒村だったが、家康はそこに江戸城をつくり、政治の中心地とした。

家康の領地は、三河(現・愛知県)や駿河(現・静岡県)など5国から、江戸のある武蔵国など関東8国に移された。

徳川家が築いた江戸城。初期のころの江戸城には、りっぱな天守閣があった。(→p.33)

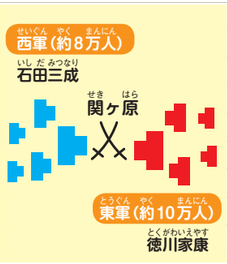
江戸に幕府を開いた人

徳川家康(1542~1616)

三河国の小さな戦国大名の家に生まれ、幼いころに駿河国の今川氏の人質となって過ごした。ねばり強い性格のもち主として知られ、有力な武将の織田信長や豊臣秀吉に協力し、彼らの死後、ついに自分が将軍となって江戸時代の基礎を築いた。

関ヶ原の戦いに勝って徳川の時代に

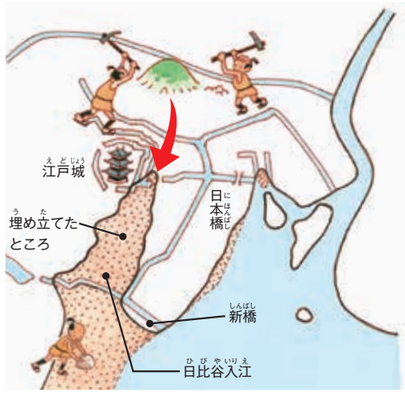
豊臣秀吉の死後、しだいに勢力をのばした徳川家康をおさえるために、豊臣家の家臣の石田三成は、豊臣家を支持する大名を集めて、家康側の大名たちと戦った。全国の大名たちが東西に分かれて関ヶ原(岐阜県)で戦った結果、家康が勝利をおさめた。この戦いの勝利が、江戸幕府を開くことにつながった。



関ヶ原の戦いのあと、西軍に味方した大名は、家康によって領地を移されたり、取り上げられたりした。

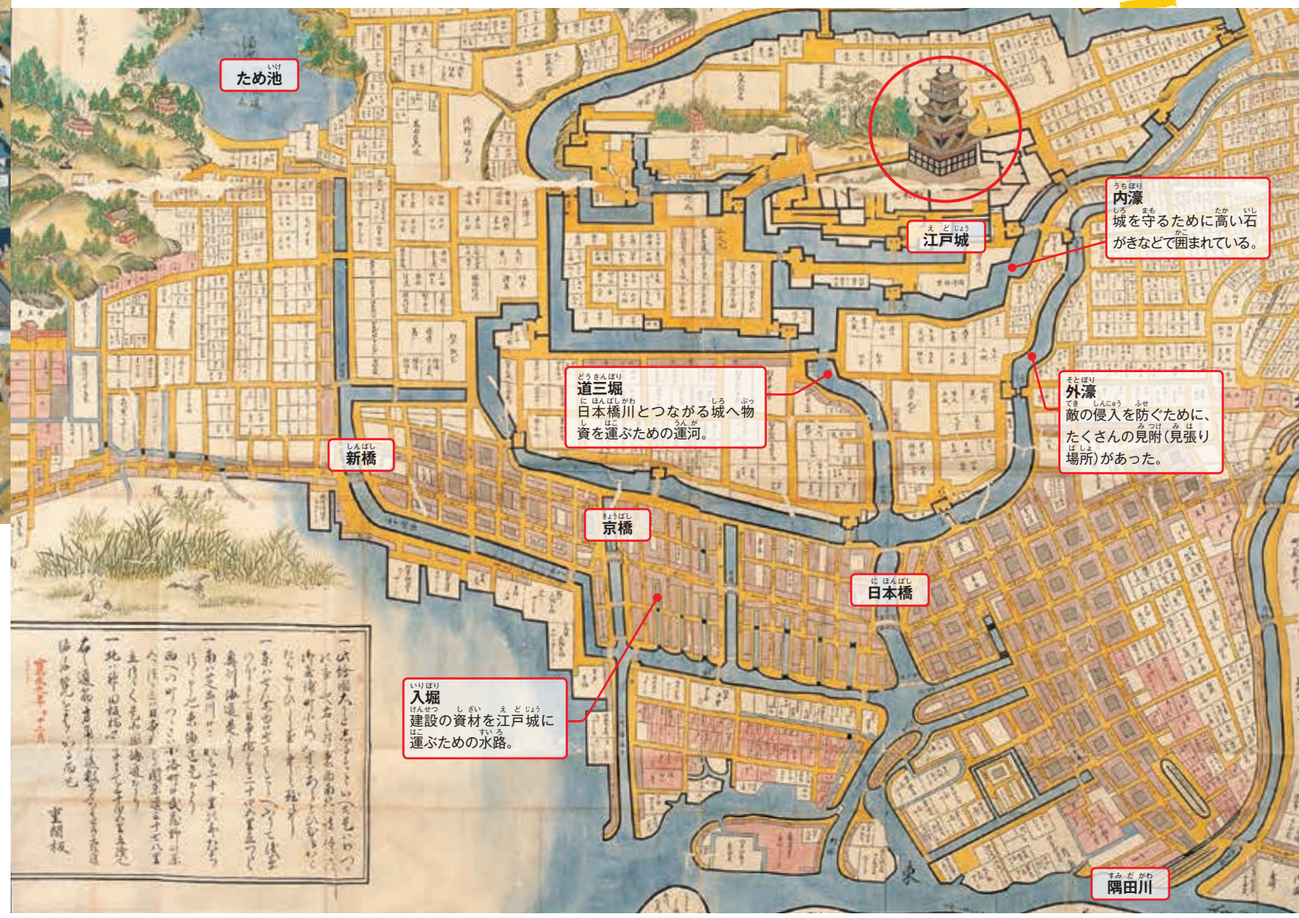
城を中心にして町をつくる

天下を取った家康は、将軍としてふさわしい城にするために江戸城の建設工事を行うと共に、城を中心とした町づくりに取りかかった。日比谷入江や湿地を埋め立てて、人が住める土地を増やしていった。町づくりの工事は家康から、2代将軍秀忠、3代将軍家光、4代将軍家綱のころまで70年以上かけて、江戸の町が整えられていった。



1606~1607年ころの江戸の町。現在の日比谷の辺りは海だったが、神田山(現・御茶ノ水駅辺り)を切りくずした土や、内濠や外濠を掘ったときに出た土で埋め立てた。

≪武州豊嶋郡江戸庄図≫　1630年ころの江戸の町のようす。

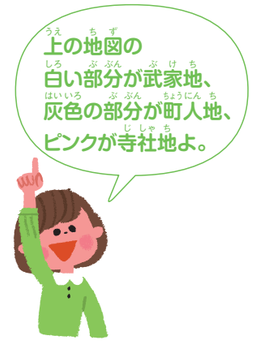


●全国の大名が工事を手伝った

家康は、全国の大名たちに命令して、城の建設工事や町づくりの土木工事を行わせた。大名たちは人を確保するために、自分の国から大勢の農民などを江戸に送りこんで働かせ、工事の費用も負担した。こうして、人やお金をつかわせることで大名の力を弱らせると共に、幕府に従う態度を試して、権力を強く示した。

●力を入れた区画整理

江戸の町づくりで家康たちがとくに力を入れたのは、「町割」とよばれる区画整理だ。城を中心に、大名が住む武家地、町人が住む町人地、寺や神社がある寺社地の3つ区分に分けられ、身分によって住む場所が決められていた(→p.22-23)。



(!) 幕府とは、武士が政治を行っていたときに、将軍がおさめていた役所のこと。鎌倉・室町・江戸時代に開かれた。

(!) 「将軍」とは幕府の代表者に与えられる武士の位で、正式には「征夷大将軍」といい、朝廷(天皇)によって任命される。